

令和2年度第2回物部川清流保全推進協議会幹事会 議事要旨

開催日：令和3年2月12日（金）

場所（時間）：高知県立青少年センター本館2階青少年ホール（13:30~15:30）

出席者：【幹事】18名（代理出席含む）別紙幹事会名簿のとおり

【事務局】環境共生課 3名

【その他】随行者9名

議題1 令和2年度物部川清流保全推進協議会の取組について（報告）

事務局より、資料1に基づき説明

【主な意見】

- ・ 子ども参加の植樹活動や小学校の環境学習の報告などを行うよう計画していたが、コロナで中止となった。発表の場は失われたが、発表までの取組を進めていたことを協議会で取り上げて欲しい。
→資料取りまとめにあたっては幹事への問い合わせを密に行いたい。
- ・ 高知河川国道事務所調査課より「流域治水プロジェクト」の取組について説明・情報提供

議題2 総会報告資料及び収集情報について（報告）

事務局より、資料2に基づき説明

【主な意見】

- ・ 物部川での清流保全に係る取組を見える化するため、指標ごとに年度での計画と実績を抽出するとの説明であったが、計画と実績はどのような概念か。
→それぞれの事業主体で適宜選択し数値でもって提供願いたい。
- ・ 体験学習の実施件数など、小学校で環境学習など実施したものも含めていきたい。
- ・ どの問題もすぐには解決できないとは思いますが長期的視点や流域全体を考え、本質的な問題を避けることなく協議会で意識を共有するための指標づくりをお願いしたい。
- ・ シカの食害で三嶺は林床のササ・スズタケがなくなり土砂が物部川に下ってきている。また強度間伐や皆伐によって山の保水力がなくなってきている。以前の多自然型川づくりから、多自然川づくりへと変化してきているが、川そのものの自然、川の水の中とか、構造とか水量とか、それで生き物が繁殖するというか循環できる。そのような自然が多自然であって、そういう川づくりをしていく。それによって物部川を復活させていこうという、そんな視点をもっていただきたい。
→県では木材の生産量を増やすという中で、皆伐を取り入れながら、生産量を増やす取組をしているが、併せてシカの防護柵等への助成もおこない保水力の回復を図る取組も行っている。カーボンニュートラルへの取組の中で、木材生産がCO₂吸収に寄与する面もあるが、急傾斜地など場所によって施業の方法を変えるなど、指標の中でも検討していきたい。また、多自然川づくりは人のためにとということではなくて、水生生物が生息するために、自然に近い状態の川を取り戻すことを目指しているため、環境の指標としては水生生物が生息できる趣旨としている。

- ・ 協議会での取組について、長い年月がかからないと効果が出ないもの、今現実的に困っていることを区分をし、取り組む必要がある。また、物部川清流保全計画を流域の人たちがどれくらい知っているか、活動を広報していくことが重要。それと、利害関係が異なる団体間の調整を行政で果たして欲しい。
→取組の指標をまとめる中で緊急的な課題が明らかになっていると思われる。明確になった上でワーキングの立ち上げなど検討したい。また普及啓発について、数値では把握しているが、シンポジウムの開催など以前と比べると認知度は上がっているものと思われる。
- ・ 産業振興計画との関係について、物部川の天然アユなど県外から観光客を呼び込む要素となっている。流域の資源を活用して、経済的な発展に寄与する面も含め計画を立てて欲しい。

その他（情報共有・意見交換等）

- ・ 先月終わりから毎日川を確認しているが、アユを見かけなくなった。物部川のキャッチフレーズである「天然アユが湧き立つ川」は天然と付いていることが大事。アユは川の魚であるが、生活史の三分の一以上を沿岸で過ごす、つまり沿岸が豊かでないと天然アユは育たない。山が荒れていることは見た目に分かりやすいが、海が砂漠になっていることは気づきにくい。山・川・海のつながりを念頭においた、流域の連携づくりを進めるために、海それから里の農業関係者を幹事会に入れて欲しい。
→幹事会メンバーについて検討していきたい。